

## 満洲字の文字表

吉池孝一

満洲文字には、モンゴル文字をほぼそのまま利用した「無圏点満洲文字」と、文字に圏点(◦や、などの記号)を付して満洲語音の区別に対応するよう改良した「有圏点満洲文字」がある。本文字表は後者であり、市川三喜・服部二郎編『世界言語概説』下巻(1955年)462頁-464頁に掲載された池上二郎氏の文字表と、それに付された池上氏の注記を合わせて作成したものである。類似の表に、1993年の都立大の講義で配布された表(落合守和先生講義。吉池は他大学に就職していたが講義に参加。)がある。これは、池上氏の表に注記の情報を書き入れたもので使い勝手が良く私は以後この表を利用して今日に至る。そのほかに津曲敏郎(2002)『満洲語入門20講』所収の表(18頁~22頁)がある。これも池上氏の表を基本にして池上氏の注記を書き入れたもの。本文字表は、1955年に依り1993と2002を参照して作成したものである。四者は根本において異なるところは無いが、本文字表を作成するにあたり入門者にとってわかり易いようにとの配慮はしたつもりである。またMicrosoft WindowsのMongolian Baitiに収めるフォントを利用する点は前三者と異なる。Windowsのフォントを利用した文字表としてはフリー百科事典『ウィキペディア(Wikipedia)』に収めるものがある。

本文字表の構成は概略次のようになっている。

I. 横に、翻字と発音、単語の位置による字形の異なり(単語の初頭の字形、中間の字形、末尾の字形。単独の字形)を配す。

①ローマ字の翻字はメレンドルフ氏(Möllendorff)の方式によるもので、発音は池上氏によるもの。

②満洲文字は、モンゴル文字の特徴を受け継いだ結果、単語の初頭・中間・末尾、および単独という位置によって字形を異にする。子音には単独の字形はないが、例外として、外国借音用に作られた文字 dz が単独の字形の下に置かれている。これは、文字 dz を母音が表記されていない一文字と解釈したことによる。

II. 縦に、母音、子音、外国借音、特殊字形 bo, bu, bū, ku, k'ō を配す。

③子音字の異なり(1)。子音字 k に点(・)を付して g とし、k に丸(◦)を付して h とする。

④子音字の異なり(2)。母音 a, o, ū の前の子音字 k, g, h と、母音 e, i, u の前の子音字 k, g, h は字形を異にする。1955、1993、2002 は、母音 a, o, ū の前の子音字 k, g, h と、母音 e, i, u の前の子音字 k, g, h を離して置くが、本文字表は両者を並べて置く。これは河内良弘(1996)に倣ったものであり、1955、1993、2002 と異なる。

⑤子音字の異なり(3)。母音 a, i, o の前の子音字 t, d と、母音 e, u, ū の前の子音字 t, d は字形を異にする。

⑥子音字の異なり(4)。母音 a, e の前の子音字 f と、母音 i, o, u, ū の前の子音字 f は字形を異にする。

⑦母音 i, o, u, ū の前の子音字 f と、母音 a, e の前の子音字 w は同形となる。

### Ⅲ. フォントなどについて

⑧本文字表中の四角の囲み  は、縦書き用のボックスである。この縦書きボックスを利用して、それぞれの“初頭の字形”（中間、末尾であっても初頭の字形でよい）をコピーして貼り合わせると下記の例のように、横書き文章の中に、簡便に縦書きの満洲文字を提示することができる。なお、下にあげた例 niorumbi (『心がしびれる』) の語末の  は、子音文字 b, p, k, g, h の下における母音 i である。1955、1993、2002 の字形は  をやや小さくしたものであり、Windows のフォント  とは異なる印象を与える。Windows のフォントには、このようなものが少ない。

niorumbi 

⑨1955、1993、2002 にあって、Windows のフォントに無いものがある。また、1955、1993、2002 にも Windows のフォントにもあるが、単独の文字として Windows のフォントから取り出せない文字もある。下記の文字表は、そのような文字を補い、右側もしくは左側に\*を付して  \* とした。

### Ⅳ. 本文字表中の「注記」について

⑩文字表中に「b, p, k, g, h の下」とあるものは、池上氏の注記に「b, p, k, g, h の下における特別の字形。」とあるものを簡略に表現したものである。なお細かな注意点は、※を付して記した。他の注記も同様。

⑪ (□) のように丸括弧を付した文字は、池上氏の注記に「括弧内は比較的稀」とあるもので、本文字表では「稀」の字を付して (□稀) とし、稀な字形であることを明示した。

## 母音

翻字と発音	初頭の字形	中間の字形	末尾の字形	単独の字形
a [ɑ]	ㄐ	ㅏ	ㅑ b, p, k, g, hの下 ㅓ	ㅕ
e [ə]	ㅓ	ㅓ ㅓ t, d, k, g, hの下	ㅓ ㅓ t, dの下 ㅓ b, pの下 * ㅓ k, g, hの下	ㅓ
i [i]	ㅓ	ㅓ 子音の下 ㅓ 母音の下 ㅓ 母音の下 *	ㅓ ㅓ b, p, k, g, hの下	ㅓ * ㅓ 名詞語尾

※i の中間字形の「母音の下」には両形があるが、これは文献による異なりであるという。単独字形に「名詞語尾」と付記したものは、名詞語尾 i が語幹から離されて書かれた場合の字形である。

o [o]	ㅓ	ㅓ	ㅓ 単音節末尾 b, p, k, g, hの下 ㅓ 多音節末尾 母音の下	ㅓ
u [u]	ㅓ	ㅓ ㅓ t, d, k, g, hの下	ㅓ 単音節末尾 b, pの下 * ㅓ 多音節末尾 ㅓ t, dの下で単音節末尾 k, g, hの下 ㅓ t, dの下で多音節末尾	ㅓ

※o の末尾の注記「単音節末尾 b, p, k, g, hの下」は「単字の末尾で。ただし b, p, k, g, hの下でしかも末尾ではすべてこの字形」の略記。u の末尾の注記「t, dの下で単音節末尾 k, g, hの下」は「t, dの下で且単字の末尾における特別の字形。なほまた k, g, hの下でしかも末尾ではすべてこの字形」の略記。両者は注記の表現が異なる。他もこれに準じる。

ū [o, u]	ㅓ	ㅓ	ㅓ	ㅓ
----------	---	---	---	---

# 子音

翻字と発音 初頭の字形 中間の字形 末尾の字形 単独の字形

n[n]      ㄋ      ㄋ 母音の上  
ㄴ 子音の上      ㄴ ( ㄵ \*稀)

<2種の k, g, h>

k[k̟]      ㄱ a, o, uの上      ㄱ a, o, uの上      ㄷ  
ㅋ 子音の上      ㅋ 子音の上

g[g̟]      ㄱ a, o, uの上      ㄱ a, o, uの上

h[h]      ㄱ a, o, uの上      ㅎ a, o, uの上

k[k̠]      ㅋ e, i, uの上      ㅋ e, i, uと子音の上      ㅋ  
( ㄱ \*稀 子音の上)      ( ㄷ \*稀)

g[g̠]      ㅋ e, i, uの上      ㅋ \*e, i, uの上

h[x]      ㅋ e, i, uの上      ㅋ \*e, i, uの上

b[b̟]      ㅍ      ㅍ      ㅍ

p[p̟]      ㅍ      ㅍ

s[s]      ㅅ      ㅅ      ㅅ      ㅆ

š[š]      ㅅ      ㅅ      ( ㅆ 稀)

<2種の t, d>

t[t̟]      ㅌ a, i, oの上      ㅌ a, i, oの上      ㅌ  
ㅌ e, u, uの上      ㅌ e, u, uの上  
ㅌ 子音の上

d[d̟]      ㅌ a, i, oの上      ㅌ \*a, i, oの上  
ㅌ e, u, uの上      ㅌ e, u, uの上

翻字と発音 初頭の字形 中間の字形 末尾の字形 単独の字形

l[l]                 

m[m]                 

c[tʃ, tʃ]                 

j[dʒ, dʒ]                 

y[j]            \*

r[r]                 

<2種のf。 i, o, u, ūの上のf = a, eの上のw>

f[f]       a, eの上       a, eの上

f[f]       i, o, u, ūの上       i, o, u, ūの上

w[v]       a, eの上       a, eの上

-ng       子音の上



## 特殊字形

bo, bu, bŭ, ku, kó など、子音と母音を組み合わせた字形は、母音が子音の中に組み込まれた特殊な字形となる。po, pŭ, hu, gu, hó, gó もこれに準ずる。

翻字	初頭の字形	中間の字形	末尾の字形
bo	𐰃	𐰃	𐰃
bu	𐰃	𐰃	𐰃
bŭ	𐰃	𐰃	𐰃*
po	𐰃	𐰃	𐰃
ku	𐰃	𐰃	𐰃
kó	𐰃	𐰃	𐰃

参考文献（刊行年順）

Möllendorff, Paul Georg von (1892) *A Manchu Grammar, with Analysed Texts*, Shanghai.

池上二良(1955)「トゥングース語」, 市川三喜・服部四郎編『世界言語概説』下巻, 研究社, 2000年再刊。

落合守和(1993)「講義資料」(東京都立大学)

河内良弘(1996)『満洲語文語文典』, 京都大学学術出版会。

津曲敏郎(2002)『満洲語入門 20 講』, 大学書林。